

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目： 基盤研究(C)  
 研究期間： 2007～2009  
 課題番号： 19530436  
 研究課題名（和文） 高度経済成長期の水俣地域における日常生活の変容と水俣病体験  
 研究課題名（英文） Transformation of Everyday Life and Experience of Minamata Disease  
 in Minamata Area of the Period of Highly Economic Growth  
 研究代表者  
 平岡 義和 (HIRAOKA YOSHIKAZU)  
 静岡大学・人文学部・教授  
 研究者番号： 40181143

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、聞き取り調査とその分析を中心にして、水俣病が生起した時期において、人々が水俣病をどのようなものにとらえていたのか、当時の生活の変容とともに考察する試みである。その中で、多くの人々が、危険なのは弱った魚であるといった日常知に基づく解釈のもと、魚介類を食べ続けたことが明らかになった。また、この時代は、水俣においても、都市的生活様式の普及が急速に進み、地縁、血縁が希薄化し、家族の独立性が高まったことが示唆された。

## 研究成果の概要（英文）：

This study is a trial to consider how people in Minamata area recognized the risk of Minamata disease with transformation of the everyday life by interview with them. It became clear that many people continued eating fishery products, based on everyday knowledge that weakened fish was dangerous. And, it was suggested that the spread of urban lifestyle advanced rapidly, and that shared territorial bonding and blood relative relation did an attenuation, and the independent nature of the family did rise.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：環境社会学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：水俣病体験 リスク認識 日常生活 高度経済成長期

## 1. 研究開始当初の背景

従来、水俣病の激甚期において、人々は貧しさゆえに、危険性を認識しながらも、魚介類を捕食し、水俣病になったと考えられてきた。しかしながら、聞き取りを行うと、必ず

しもそうとは言えない語りに出会う。人々は、日常知を用いて、魚は大丈夫だと考えて、捕食し続けた可能性があるのである。

そこで、人々がどのような日常的な認識枠組みを用いて、水俣病をとらえていたのか、

様々な人々に聞き取りを行うことによって、明らかにする必要があると考えられた。

その際、居住地域、職業などによって、人々の水俣病体験は多様であると考えられた。したがって、様々な職業、地域の人々に聞き取り調査を行う必要性が高いと判断された。

その場合、水俣病は、人々の日常生活の中において体験されたことであって、当時、すなわち高度経済成長期の人々の生活の有り様を抜きにして語ることはできない。それゆえ、その当時の人々の生活の変容と重ね合わせて、水俣病の体験を聞き取る必要性が高いと考えて、この研究を計画した。

## 2. 研究の目的

本研究は、水俣地域の人々が水俣病をどのように体験したか、その同時代史の中で考察する試みである。すなわち、研究の目的は2つあった。

(1) 日常生活の中で、水俣の人々が水俣病をどのようにとらえ、どのように対応したのか、またなぜそのような認識・対応がなされたのか、明らかにすることである。そのことを通して、リスクに関する問題が発生したときに、行政などが人々の日常知をいかなる形で取り込みながら対処すべきなのか、考察する。

(2) そうした体験がなされた当時の水俣地域の状況を、特に人々の生活の変容ということに焦点を当てつつ、記述することである。それによって、高度経済成長期という時代の様相を浮き彫りにする。

## 3. 研究の方法

調査研究は、人々の聞き取り調査と、高度経済成長期にかかわる統計データ、文献の収集・解読とを並行的に行った。

### (1) 聞き取り調査の実施

1950～60年代に水俣に居住していた人々に対して、聞き取り調査を行った。その際、以下のような点を考慮して、対象者を選定した。

①魚介類に対する認識を問題にするので、魚とのかかわりの異なる人々を選んだ。また、漁村、街場、山間部など、多様な居住地域の人々を対象にした。

②さらに、人々の生活の変容にも焦点を当てるので、漁民、鮮魚商といった漁業関係者だけでなく、家電商、自転車店、洋装店といった多様な職業を営む人々に話を聞いた。

人々には、自らのライフストーリーと絡めながら、生活の変容、水俣病に関する体験、認識を語ってもらった。

(2) 高度経済成長期に関する統計データ、文献資料の収集、解読

以下のような統計データ、文献資料を収集し、上記の聞き取りの結果と照らし合わせながら、解読を進めた。

①水俣市、熊本県の1950～60年代の生活状況を反映する統計データ、調査資料

②水俣病、および当時の水俣に関する文献資料

③高度経済成長期の生活変容に関する文献資料

## 4. 研究成果

本研究では、目的に照応した形で、以下の2点について、明らかにした。

### (1) 水俣病のリスク認識

水俣病の体験については、被害者に焦点を当てた聞き書き、研究は多い。ところが、当時の水俣市民に語ってもらった記録によると(「私のとっての水俣病」編集委員会編『水俣市民は水俣病にどう向き合ったか』葦書房)、彼らの体験は、その社会的位置によって、非常に多様性をもつことがわかる。この点は、本研究において実施した聞き取りにおいても、同様であり、従来の水俣病に関する著作にある定型的な記述とは、かなり異なるものである。

たとえば、多くの著作では、1956年(昭和31年)5月1日に水俣病が公式発見され、1959年(昭和34年)12月の漁業補償、見舞金契約によって、収束していくと、記述されている。それは、確かに歴史的事実である。だが、多くの水俣の人々にとっては、水俣病はそのようなものとしては、体験されていない。かなりの人々、特に身近に患者がいない人々にとっては、いつはじまり、いつ終わったか、定かではない出来事なのである。

### ①魚介類に対するリスク認識

したがって、彼らにとって、同じ水俣で起こったことでありながら、水俣病は、遠い出来事である。その点で、特に、興味深いのは、彼らの魚介類の摂食に関する語りである。一般に、水俣では、当時の人々は水俣湾の魚介類は危険だと考え、食べるのを忌避していたと考えられている。確かに、水俣の鮮魚商の売り上げが落ちたのは事実である。だが、人々は、取り立てて魚を食べるのを忌避していたとは認識していない。

そうした人々は、2つのタイプの論理を持ち出す。第1は、「弱った魚」、「フラフラした魚」ないしは「浮いた魚」が危ないという論理である。これは、実際に弱った魚、浮いた魚、フラフラした魚を目撃した話とともに語られることが多い。確かに、弱った魚には

有機水銀が多量に含まれていた可能性が高い。だが、普通の魚も程度の差はあれ有機水銀に汚染されていた。にもかかわらず、病気にかかったから魚が弱ったり、フラフラするのであり、それを食べたから奇病になったという論理が信じられていた。

こうした論理を語る人の中には、魚は捕っていたものの、漁民ではない人が多い。だが、漁民ではないが、魚の専門家ともいべき鮮魚商の人々も類似の論理を述べている。

第2は、患者たちは「魚ばかり食べていたから」あるいは「野菜ないしは米を食べていなかったから」水俣病になったというものである。これは、患者多発地域の北側に位置する袋地区の農民や住民から聞かれた。

この論理は、患者が多発した湯道に住み、水俣病で娘一人を亡くし、胎児性水俣病の娘をもつ女性によっても語られている。つまり、患者が多発していた漁村地域でも、初期の段階では同様の論理が流布していた可能性があるわけである。

これらの論理は、多様な地域、職種の人々から聞かれるものであり、広範な人々の間に流布していた可能性がある。しかも、素人だけでなく、魚を扱う鮮魚商、医学的知識を有する保健婦といった人々すらも同様の論理を用いていたのであった。

## ②リスク認知の論理構造

この論理は、魚を取り、売り、食べるといった、人々の生活を維持させる方向に機能した。それは、「病気の魚を食べたから病気になった」「野菜や米を食べていないから病気になった」という日常的な知識に基づく、因果的な説明さえ含んでいた。ここで用いられているのは「弱った魚ー生きのいい魚」、「魚しか食べないー野菜や米も食べる」という二項対立図式である。使われたのは、彼らの日常的な経験に親和的な徴であり、彼らにとってはリアルなものであった。その徴を利用することによって、自らを病気になった人々とは異なる者として位置づけ、安心することができたわけである。そこには、患者たちを弱った魚を食べるもの、野菜や米を食べられないものとみなす、差別的な意識さえ潜んでいたように思われる。

さらに、この論理は、人々の間で共有されているような「徴」に基づいて、自分が直面した事態に対し当面の間自ら納得し、他者を説得するために使われる。だが、当初この論理を用いて魚を売っていた鮮魚組合の組合長が、魚介類がまったく売れなくなったときに、水俣漁協の魚の仕入れを中止する決定をしたことに示されるように、それを用いて自分たちの生活が維持できない事態になれば、簡単に捨てられてしまうのである。

## ③日常知に基づくリスク認知への対処

水俣病と同様に、不確実性という特性を有する事態は、近年の食中毒事故、技術的事故にも通底するように思われる。とすれば、こうした問題においても、水俣病において見られたのと同様の論理が作動する可能性は常に存在すると考えられる。

リスク学の分野では、こうした問題を、客観的リスクと主観的リスクがずれる「認知バイアス」として概念化し、それをもたらず要因について説明が進められている。だが、水俣病事件の初期段階では、どの種類の魚が、またどの海域の魚が危険か、必ずしも特定されていたわけではなかった。また、水俣市衛生課の上司と部下の間でさえ、魚の危険性の認識に関して大きなギャップがあった。

それゆえ、実践的な判断を下す当事者に、「バイアス」をもたらず要因を考慮に入れることを求めるには無理がある。むしろ、専門家を含め人間の日常的な振る舞いには同様の論理が入り込むことをあらかじめ前提にすべきなのである。水俣病事件の場合は、人々の間に弱った魚が危ないといった論理が流布していた可能性があった以上、明らかに自主規制ではなく、行政による漁獲・摂食禁止措置が必要であった。これは、近年提唱されている「事前注意原則（予防原則）」という観点からも言いうることであろう。

同時に重要なのは、関係する人々の間でいかに情報の共有をはかるかということである。水俣市の衛生課のように問題に対応した組織の中でさえも、わずかな経験の差によって、状況に対する大きな認識ギャップが生じることがある。このように当該の組織の中でさえも、公式に情報が伝達されていないと安心する論理が生み出されてしまうならば、ましてや水俣市民のように、魚介類の危険性に関する情報を公的なルートで伝達されなかった一般人が、何らかの有徴性をもとに、安心のための論理を作り上げ、流布してしまうことは、十分あり得ることである。となれば、集会、文書など、直接的かつ正確な伝達が可能な形で、情報を伝えていくことが重要であると考えられるのである。

さらに、水俣では、漁民の一部は、密かに魚を他の地域に販売していたという。そうした事態は、途上国の貧しい人々の間では、容易に起こりえる。被害の拡大を防ぐためには、漁業補償をともなった漁獲禁止が必要である。だが、乏しい途上国の財政事情の中では、そうした措置はとりがたい。途上国に対する環境規制への協力は、その実施にともなう漁業補償のようなインセンティブ分の経費に対する財政的な支援も含んでなされるならば、より有効性の高いものになると思われる。

(2) 同時代史としての高度経済成長と水俣病

人々の水俣病体験は、その当時の生活の一部に過ぎない。したがって、水俣病についての語りは、必然的に当時の日常的な生活体験と表裏一体のものとして、立ち現れる。そして、時代は、いわゆる高度経済成長期である。それゆえ、人々は生活の劇的な変化のただ中にいた。それが、水俣にあつては、水俣病という事件と同時並行的に生起している。水俣にあつて、人々は、高度経済成長の正と負の側面が交錯する生活をおくってきたのである。

そのため、水俣病に罹患し、漁業が立ちゆかず、生活苦にあえいでいた漁民家族を除いて、人々の記憶の中で、水俣病は後景的なものとして存在している。といて、人々の眼が、自らの生活の向上に向けられていたがゆえに、水俣病に対する関心が薄かったというように、直接的な因果的説明をしたいわけではない。ただ、こうした水俣の有り様は、辺見庸(『不安の世紀から』角川文庫)が体験した地下鉄サリン事件の光景とだぶってくる。辺見は、事件が起きた直後、地下鉄の出口付近で、抱え出されて倒れている被害者の脇を、急ぎ足で仕事へと向かう多くの人々の姿を目撃したのである。

さて、水俣病の激甚期は、高度経済成長の始発期であり、人々の生活も急激に変化した時代である。それは、道具の研究者である山口昌伴が述べているように、続弥生期から一気に近代に移るような大きな変化であった。それが、日常生活の様々な分野において同時に生起した。結婚、出産、家事、仕事等々、聞き取りの中でも、非常に多岐にわたる話を聞くことができた。その多様性を考えると、簡単にまとめることは不可能である。そこで、いくつかの分野に関わる語りから抽出される時代の特性について、書き記すことにする。

#### ①結婚と出産の変容

聞き取りは、本人のライフコースに即して行われた。そのため、もっとも登場することが多い出来事が結婚と出産である。その二つにおいても、大きな変化が見られたのが、この時代である。

まず、結婚については、見合い婚から恋愛婚というより、世話焼き婚から交際婚への急速な移行が見られた。つまり、地縁、血縁、職縁といった伝統的な関係に対する信頼からなされたものが、交際を通じた本人同士の信頼形成によるものへと変化したのである。

これとともに、結婚式も、変容を遂げた。それまでは、自宅で地縁、血縁、職縁でつながった人々の前で、かつ彼らの手伝いのもとで結婚式は行われていた。それが、一つには外部の神社などでの神前結婚式と専門の会

場における披露宴へと変わった。また、もう一方では、人前結婚式と披露宴を、公的な会館などを使って会費制で行うスタイルもとられた。その場合、水俣では、チッソの組合員を中心に、うたごえ結婚式という形式も採用された。どちらにしても、結婚式は、家の外へと外部化されたわけで、同時に前者の場合、様々な縁者から専門機関の手にゆだねられるようになったわけである。

次に、出産についても、大きな変化が起きた。自宅において助産婦の手でなされたものが、外部の医院・病院において医師の手でなされるようになったのである。これを、船橋恵子は施設化と医療化と呼んでいるが、そこで起きているのは、やはり家の外への外部化と専門化であった。また、そこでは、地縁的なつながりの強い助産婦から、見知らぬ他者である医師へという変化も、生じていた。

このように、結婚、出産という出来事については、家の外への外部化と専門化という共通の傾向が見られた。同時に、それは、職縁を除く地縁、血縁といった伝統的な関係から切り離されることでもあったのである。

#### ②家電などの普及による変化

この時代は、経済成長とともに、テレビ、冷蔵庫、洗濯機といった三種の神器を中心に、家電製品が、またバイクなど、そして熱源としてのガスや上水道が急速に家庭に入り込んだ時期でもあった。この導入の早さは、水俣でも同様で、先に言及した山口が続弥生期から近代へと述べているように、目を見張るほどであった。それは、同時に、そうした物品などを販売する小売業の繁栄をもたらした。ある家電商が回顧するように、商品があれさえすれば売れたのであった。

こうした商品を最初に購入したのは、自営業層であったが、チッソの労働者を中心に、労働者層の購入時期も決して遅いものではなかった。もちろん給与の急速かつ持続的な上昇がそれを可能にしたのだが、割賦制度が購入を促進した点も見逃せない。家電を中心とした家財という面では、中間層と労働者層の外見格差は縮まったのであった。

また、自営業では、業務の急激な拡大は、住み込みを含めた多くの従業員を抱え込むことを可能にした。しかし、一方で、社会の給与水準の大幅な上昇は、小遣い程度で丁稚的な形で従業員を雇用する仕組みを崩壊させた。一般企業とは異なり、業主家族との濃密な人間関係は維持された部分はあるものの、従業員の賃金労働者化が進んだのである。

さらに、家電や上水道の家庭への導入は、地縁を中心とした伝統的な人間関係を希薄化させた。洗濯機、上水道の普及は、川べり、井戸端での交わりを消失させた。また、テレ

びも、最初期は、テレビのある家庭に近所の人々が押しかけるという状況を作り出したが、迷惑をかけるからという理屈も語られる形で、近隣に普及が進んでいき、テレビを媒介にした交わりは、家庭内に閉じられるようになっていったのである。

### ③まとめ

以上、結婚と出産、家電の普及を中心に、水俣病の激甚期の水俣の生活変容を記述してきた。先にも触れたように、聞き取りをした内容は、生活の多様な側面を含んでいたが、研究期間の間にすべてをまとめることはできなかった。今後の課題としていきたい。

しかし、これまで記した部分からも、この時代について言いうることがある。それは、家族が、地縁、血縁といった伝統的な人間関係からの独立性を強めていった時代だということである。それを可能にしたのが、家電製品、結婚式場、医療などの社会サービスであった。倉沢進の言を借りれば、これらの「都市的生活様式」の普及が、地縁、血縁からの家族の独立を促したということである。

水俣では、それを加速したのは、水俣病というより、昭和36年からはじまった安定賃金闘争であった。この闘争は、労働者を第1組合と第2組合に分かっただけでなく、地域の人をも分断することになった。そのしこりはいまだに大きく、同窓会などを開けない人々もいるという。水俣病より安賃闘争の方が水俣にとって大きな（ふとか）出来事だったと語る人が多いのである。

その一方で、人々の語りの中で、水俣病の影は薄い。もちろん、水俣病が隠されたということも、語りたくない、語りがたい出来事だということもあろう。また、特に町場、山側の農村の人々にとっては、海辺の人々とつきあいが薄いという面もあろう。しかし、印象としては、闘争としての水俣病は見聞きしても、病としての水俣病についての体験が非常に薄いと感じられる。患者の方々ととのつきあいなどもあまりないこともあって、同時代に同じ水俣で生活していても、リアルな水俣病の体験をしていないように思われるのである。

そのため、「本当の患者」という語りがしばしば聞かれた。そのイメージは、劇症型の患者のものだ。「偽患者」という言い方はなされないものの、患者の範囲はひどく限定的である。

他方、そうした人々でも、市内を通過するバスの窓が、水俣病の町というアナウンスとともに閉められた、うつるのでマスクをしなくてはと言われたなど、水俣病にまつわる差別を体験している。患者とのつきあいの薄さを含む水俣病体験の希薄さと、水俣病にまつわる差別体験。こうした体験の偏りが水俣病

の名称変更運動の背景に存在するように思われる。

高度経済成長ともなう大きな変動のうねりの中で、日々の生活の変化に対応することに追われ、交流の薄さもあって、水俣病について大きな関心をいだくことなく過ごしてきたのが、水俣の人々のかなりの部分を占める。「もやい直し」が言われて久しいが、それぞれが経験してきたことを交錯させない限り、本当の「もやい直し」は実現しないのではなかろうか。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 平岡義和、結婚と出産の変容—水俣と水俣病の物語（1）、人文論集、査読無、59-1、2008、pp.1-19

〔その他〕

資料集

- ① 平岡義和、高度経済成長期の水俣地域における日常生活の変容と水俣病体験資料集、2010、31

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

平岡 義和 (HIRAOKA YOSHIKAZU)

静岡大学・人文学部・教授

研究者番号：40181143